

パイプロコンバクター

MVH-200<油圧式> 使いやすさが大好評



MVH-200D

重輾圧を目的として開発された三笠パイプロコンバクターシリーズにニュータイプが加わり好評を博している。

このパイプロコンバクターはMVH-200と呼ばれる機種で、この機種の最も大きな特長は、特許申請中の油圧操作による振動装置にある。合せて従来のケーブルで行っていた走行レバーの伝達も油圧式に変えたので、前後進の操作が軽くスムーズになった。また中立が可能となったのでその場で停止したまま輾圧する、いわゆるスポット輾圧が可能となりランマーのような使い方もできる。

オペレーター的身長に合わせて自在に高さを調整出来るハン

ドルは防振性に優れ、またレバー類は大きく扱いやすくなっている。操作性及び安全性の面でも、転倒しにくい低重心設計としている。その他、ベルトカバーをシールドする事により異物



の巻き込みによるベルト切れ等のトラブルを減らす等、細心の配りの行き届いたパイプロコンバクターである。

MVH-200の最大の特長である油圧操作により、前進・後進のキック力が抜群で機体が低いほうへ沈み始めても逆進さ

仕様	型 式	MVH-200D	MVH-200G
概 重 量 (kg)		190	175
寸 法 (mm)			
全 長		1,325	1,325
全 幅		500	500
全 高		1,020	1,020
輾圧盤長さ		750	750
" 幅		500	500
振 動 数 (V.P.M)		5,200	5,200
遠 心 力 (kg)		3,200	3,200
走 行 速 度 (m/min)		0~23	0~23
エ ン ジ ン		ロビンDY30D	ロビンEY28D
最大出力		5 ps/3,600rpm	5 ps/3,600rpm

株式会社住建さんへの納入を受けた仕事はスピーディーに、そして完璧な工事で完工を目ざすをモットーの柳住建さん(長野県佐久市・田中一社長)では、このMVH-200型を、その能力はハンドガイドローラーの締め固めはるかに上回り、ランマーの手軽さをそなえ、ランマーの三台分以上の仕事こなす、文字通り仕事をする輾圧機としてご採用をいただいております。

あちこちで企業のイメージ効果を強めるCIが試みられている。この時代の文化を求める近頃の風潮から生まれた流行現象だろうが、専門家の手でかなり高度な技術と理論にもとづいて行われるだけに成功例もよく目につく。

しかしCI基本理念は昔も今も変わりはないだろう。

あらためて三笠マークを見つめるとき、なかなかのものだと感心する。自己満足よと笑われるかもしれないがマークに限っては一点非のうちどころなしと信じ、先人の業に

三笠 モンテカルロ(WRC)を走る

モンテカルロラリーにスポンサーとして参加



〔上〕スタート台〔下〕沿道の声援に応えて

モータースポーツ雑誌を賑わしているモンテカルロラリーに弊社もスポンサーとしてグループNに参加した。

雪と氷のモンテカルロラリーはWRC(世界ラリー選手権)の開戦戦として毎年1月に開催されるが、今年はヨーロッパ全土に亘る暖冬の影響で様相も一変したレースとなった。ワークス勢の戦いは、テレビや雑誌で紹介され、ランチャと互角に戦うトヨタ勢、三菱勢に今年も目が放せない。

これらワークス勢が火花を散らす中で、グループNと言われるプライベーターの参加も認め

られている。弊社取引先の社長もカーマニア高じてラリードライバーとして参加。仕事の都合で出られない年もあったが、一九八一年以来、今年で六度目と上位入賞を狙うには格好な位置であったが、無念にもエンジン不調のため途中でリタイアを余儀なくされた。

車は最新型ランチャ デルタ HF インテグラレ 16バルブ排気量二〇〇〇cc、二〇〇馬力以上、小型軽量の四輪駆動マシンで改造費含めてざっと一千万円、趣味にしては高くつくが、部屋に飾りきれない程のトロフィーの山はその実力をうかがわせる。選抜された者のみ通過を許されるラリーゲートでの緊張感は何物にも優るものと思う。見る楽しさから参加する楽しさを求めるというヨーロッパにおけるラリーの定着度を強く感じるとともに次回こそは、我々の夢をのせて大なる活躍を期待したい。

ドライバー
イメール・フランス社長
ジャック・フォッサ氏
ナビゲーター
同社経理部長
ジョルジュ・ロマネ氏
本年度成績
途中リタイア

敬意を捧げる。ただし欧文字を羅列には検討の必要がありそうだなと考えるながら工場訪問の帰り道を走った。もう夜になっていて光の海の東京が建物の影を浮かべてくる。横浜オデオン座で見たドイツ映画「ウィーン物語」の曲が頭の中で鳴りはじめた。戦後間もない日比谷公会堂で聞いた大谷渕子のソプラノ「春の声」は私に音楽の素晴らしさを決定的に植えつけたのだった。焼けビルの渋谷東横劇場もありありにうかぶ。今すべてまばゆい光の海である。

春宵のせいかな実に美しい。するとつい回想的になり、遠い記憶とはいえ焼け野原の東京がまぶたに甦り、よくぞここまで復興したものよと感じ



三笠の機械も大いに貢献したのである。焼け跡のビルの姿が青春の思い出にダブって見えてくる。焼け跡の前の古めかしい建物も浮んでくる。横浜オデオン座で見たドイツ映画「ウィーン物語」の曲が頭の中で鳴りはじめた。戦後間もない日比谷公会堂で聞いた大谷渕子のソプラノ「春の声」は私に音楽の素晴らしさを決定的に植えつけたのだった。焼けビルの渋谷東横劇場もありありにうかぶ。今すべてまばゆい光の海である。

盛況に建設機械展示会

幕張メッセ

日本建設機械化協会主催の平成元年度建設機械展示会が一月二十五日から四日間の日程で日本コンベンションセンター「幕張メッセ・国際展示場」に於いて開催され、メーカー九十五社、ゼネコン十五社の計百五十社が新鋭機・工法を出展し、入場者も四日間であ

万三千百人にのぼり過去最高を記録した。会場の幕張メッセは、わが国最大の展示場を誇り、また室内展示場のため、出品各社とも趣向を凝らした小間に自慢の新鋭機をずらり展示し、気合いのこもった展示会となった。

一月二十五日(木)

第一日は、オープニングセレモニーがあったりし、初日独特の華やいだ雰囲気の中で始まった。展示場は屋内という事で、機械の実演ができず、出展メーカーは独自性を打ち出すため、各ブースの中でディスプレイに工夫を凝らし、またカラフルになった出品機械が、会場をより華やかさを増していた。

一月二十六日(金)

日本上空に寒気が停滞し非常に寒い一日ではあったが、九時三十分の開場と同時に東北からの団体客がどっと来場し、一気に賑やかになった。遠くは北海道のレンタル関係のお客様、また三笠代理店の方々も多数三笠のブースにお見えになり、高周波パイプリーター、ランマー、プレート等の前で足を止められ

熱心に説明を聞かれていた。特にホワイマンパワーローウェルには関心が高く、ビデオを見ながら質問され、特にユーザーさんが真剣に聞き入っておられた。詰問も大忙しの状態でした。 第一課 須田記

一月二十七日(土)

第三日目。今日は土曜日という日もあって、関連業界のお客様以外にも様々なお客様が入場された。工業高校の生徒さんが団体で見えたり、「幕張メッセ」を観ることを目的に家族連れで訪れた方や東南アジアからの観光客の方々等、当日は大変な賑わいでした。それらのお客さんに混じって平日は忙しかつて見学に来られない貿易商社の方々や、各地代理店の方々の休日を利用してのご来場には大変有難く思いました。

このような賑わいの中、今回の展示品で注目を集めたのはホワイマンの搭乗型パワーローウェル、無線操縦のインパクトローラー、防音型ランマー等、昨今の建設業界の現状を反映するように省力化、低騒音型機械でした。そしてご来場のお客様より頂いたこれら機械に対するご要望は今後の三笠製品に反映させていただきます。

一月二十八日(日)

建機展もいよいよ最終日を迎えて、早朝より多数の入場者で相変わらずの盛況であった。日曜日ということもあり、子供連れのお客様も多く、展示品を見る真剣な表情の中に、ときおり見せる子どもたちへの暖かい視線がほほえましい。

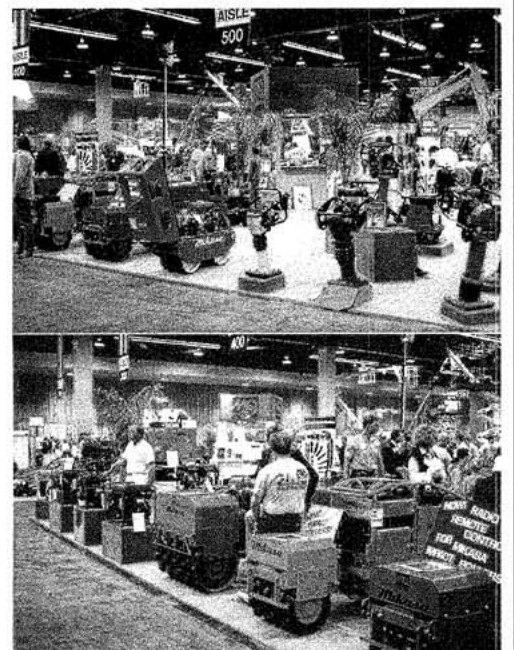
とわくわくで、今日もホワイマン人気が続く、人垣ができ

輸出二課 木村記

るほどの反響。特に子供達にも興味津々であったようで、「おじさん、これ飛ぶの?」何んて質問されたり、搭乗型に乗ってみたいという子供達が列を始める。北海道からは、三笠レンタル会の方々も前日の館林工場の見学に続いてお見えになった。新製品のご紹介や説明にも熱心に耳を傾けていただき、活発な商談も行われた様子。遠路はるばるお疲れのところありがたうございました。

毎年二月に開催されるARA(アメリカレンタル協会)ショーを三年ぶりに見学した。前回はキャンブルの町ラスベガスであったが、今回はデイズニールンのあるアナハイムにて二月十二日より十五日の四日間開催された。来場者の大半が家族連れというところもあり、来場者の家

ARAショー 華やかな演出と 旺盛な営業努力



展示の演出もセールスマンのシャツもカラフルで来場者の注目も集めた

ワールド・オブ・コンクリート USA '90を視察して

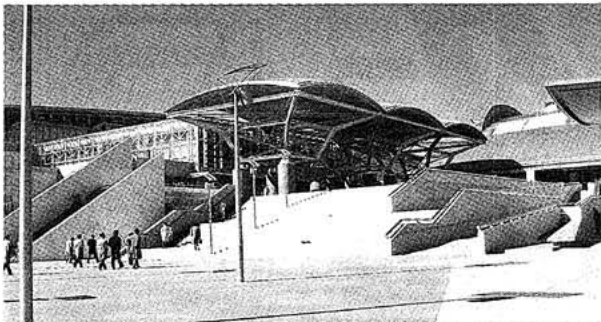
エドナ・フアーバー女史の主演映画「ジャイアンツ」の舞台となったテキサス州最大の都市ヒューストンは空港に降りた瞬間よりずばりアメリカを感じさせるビックな都市である。

今年「ワールド・オブ・コンクリートUSA '90」はこの南部の大都市ヒューストンで一月二十日より二十三日まで開催された。会場はNASAと並ぶ観光名所、世界初の屋根付球場「アストロドーム」と「アストロホール」、「アストロアリーナ」の隣接する三会場である。

会場にはコンクリートに関連するあらゆる機械、資材、化学薬品などが所狭ましと展示されているが、やはり自然と自社の製品群と競合となる小型建設機械が目が向いてしまう。そうした中、特に今回注目に値するのはパワーローウェル(コンクリート床上げ機械)の展示の多いこと、中でも近年普及の著しい搭乗型パワーローウェルの出展がホワイマン社を含め六社もあつたことである。弊社でも昨年より搭乗型パワーローウェルを販売し、日本の普及に力を入れているが、MQ社レビン社長の「今後搭乗型パワーローウェルは急速に普及する」という言葉を裏付けるものとして大変参考になった。

その他この展示会はハード面だけでなく、デモンストレーションによる工法の説明や各種セミナーの開催などの、ソフト面にも力を入れており今後とも我々関連業界関係者にとっては目のはなせない展示会になりそうである。

来年の「ワールド・オブ・コンクリートUSA '91」はネバダ州ラスベガスで開催の予定。興味のある方は展示会などの資料をお送りいたしますのでご連絡下さい。



京谷弘也記

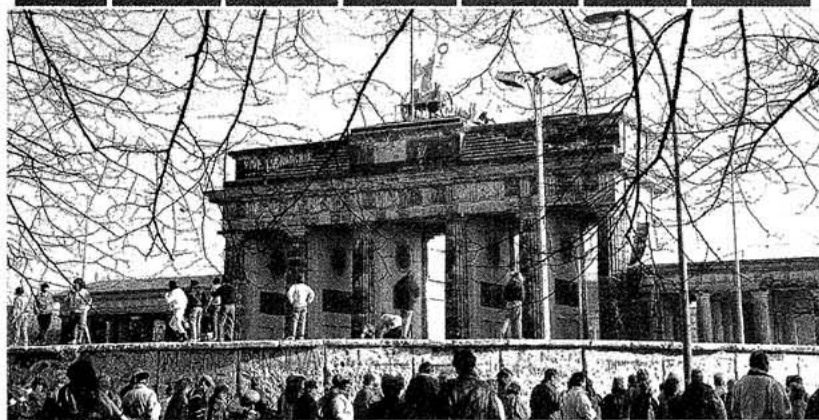
輸出一課 加瀬記

輸出一課 加瀬記



輸出一課 加瀬記

BERLIN



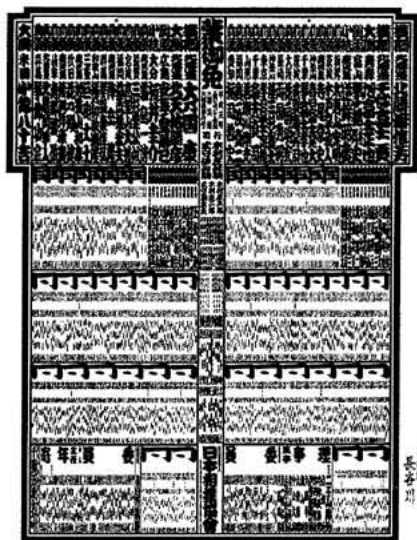
となつて爛漫の春を謳歌してゐるけれど、この両国は21世紀という新しい時代の世界とどのように関わつて行くのであろうか。

西側の壁際の随所に人名と年月日を記した白い十字架が花に埋もれて立っている。西側への脱出に失敗した人達の、今となつてはことさらに悲しく空しいモニュメントである。

空港へ向う車の中で、私はあの白い十字架となり果ててしまつた人達の渴望した『自由』、さらにその自由を渴望する民衆の力が一つの全体主義を崩壊させてしまふすさまじさに思いを巡らせていた。

たとえそれは饑えようと爛れようと、『自由』の中で生きられる事は幸と言うべきなのか……遠い昔、やはり全体主義の中で育つた愛国少年は少々戸惑うのである。

通り店の若い衆に、触れ太鼓も叩き回らせたので会場の空地には人が一杯。そこへ柏竜が二人の取りの（フンドシカツギ）を従えて御到来。さっそく豆行司が装束をつけて子供相撲がはじまり、取りの四股を踏んでぶつかり稽古を見せてもらったりして町会から大変喜ばれた。私も嬉しくて柏竜一行を銀座へ連れ出してご馳走した。この時の取りの一人が山形県出身十六才の少年で後の柏戸だったのである。よほど料理が口に合ったのか柏戸は私を旦那さんと呼んだ。「旦那さんはやめて呉れよ」と、それ以来私を「アニさん」と呼んで親しんでくれた。彼はその翌年は早くも序ノ口に就いて大きな未来を感じさせていた。伊勢ノ海部屋との関わりは私のお袋のお得意様で横浜のある建設会社がこの部屋のヒイキだった。



ど地方巡業中で困ったが大鵬親方に話したら幾人か集めて稽古風景を見せてくれた。しかも大鵬部屋では相手が外国人だからと牛肉のチャンコを作ってくれたのは有難く味もまた格別だった。ワンダフル、サンキューの連発だったのは勿論のことだ。

相撲部屋には「弟子の光は七光」と皮肉な言葉あるやなしや。ともあれ、強い弟子が出ればその親方は協会に恩返しが出来たことでよい立場も出来てくる。

だから親方が熱心に弟子を養成するのは当然だが、もつと親身になって面倒を見るのがオカミさんだ。まさしく内助の功。けっして表に出ないで、陰で母親代りにそれぞれの躰や身の上相談まで一身に受けている姿は崇高で頭がさがる。ぼつぼつ時間が来たようだから続きは、また次回に。

ベルリン空港に降り立つて日本からはるばる九千キロメートルの長い距離を飛んできたという感慨もさることながら、もう半世紀近い歳月を経てしまった今もなお、鮮やかに甦る回想に私はすっかり浸り切っていた。

『ベルリン』それはパリにもロンドンにもない親近感とひとしおの懐かしさを私に抱き続けさせてきた街である。

中学生であつた私は、夜更けるとラジオを抱くようにして一生懸命ダイヤルを回し続ける。雄壮なナチスのマーチに続いて「日本の皆様こちらはベルリン放送局です。」と日本語放送が始まる。潮が退きやがてまた寄せらるやうにそのアナウンスの声は次第にか細くなり、また雑音とともに大きくなる。共に連合国と戦う同盟国のニュース、とりわけドイツ軍の電撃的勝利を伝える報道は愛国少年の血を湧かせる、頼もしく心強く胸の中へ響くのであつた。信州の片田舎から、遙かなベルリンという街に想いを馳せてみる……しかしし

ルリンは遠い街であつた。

■ ■ ■ ■ ■

最後の攻防戦で完膚なきまでに破壊されたと聞いたベルリンは、やはり古い歴史の重みを残す他のヨーロッパ諸都市に比べるとそこはかない哀愁とかげりの漂う街である。西側にも東側にも無数の弾痕を残す建物や当時のままの廃虚で放置されている裏通りも痛々しい。

街を南北に分けるウンター・デン・リンデンの大通り、その菩提樹並木のかたなにブランデンブルグ門の偉容が厳そかに立ち、「ベルリンの壁」は門の前に立ちはだかつて文字通りベルリンを東西に分断し、重く厚く南北に連なっていた。

意外とそのこにはあの興奮のどよめきもなければ緊張感もさらになく、西側の各国からやってきた「観光客」が思い思いに壁を叩き削るハンマーの音が響く。装備も道具も一きわ見事なのはプロの毀し屋、その場で欠いた壁の破片を路上に並べて売る即席露店や、人出を当て込んだ屋



という写真集が積まれている。頁を繰るとウンター・デン・リデンを行くオープンカーのヒトラーとそれに続くドイツ機甲軍団の雄姿が鉤十字の旗の中を威風堂々と続く……人の気配に振り向くと私の肩越しに覗き込んでいたドイツ人と視線が合い、彼はとっさにニタリと笑って私が置いた本を早速に取り上げた。どうやら同年輩と見た彼も、かつて愛国少年であったのかそれとも熱烈なヒトラー・ユーゲント（青少年団）の一員でもあったのだろうか。

東ベルリンの検問所から乗った電車で西側の動物園前駅で降りると、辺りは西ベルリン随一の繁華街クラーダム通りに面したの歓楽街である。ポルノショップが並び巷には資本主義の饅^{ヨッ}えた匂いが漂う。たつた今東側を見てきた私にはそれは異様な光景と映ったけれども、見なれてみれば東京の街とてさして変りのない風景である事に気付く。

共に戦い、破れたかつての同盟国はいま共に世界の経済大国

＜その2＞



相撲部屋はどこでもかま大變に儀作法の厳しいところだ。早朝から拭き掃除やチャンコ番など分担もきちんとしており、親方方は稽古土俵のあがり座敷の正面で稽古を見て指導する。弟子たちは入門と同時に相撲協会の教習所へ半年通って基本訓練を受ける義務がある。そこで習い受けの義務がある。そこで習い受けの義務は手はじめに朝日力士の胸を借りてぶつかり稽古した。それは読んで字通りの激烈なぶつかりである。相手の胸をめがけて頭ごと肉弾突進。これをこらえて押し返さずにヒョイとひねると弟子はすっぴんころり。だが見事に受身を使っただけでなく、取組み実践稽古では渾身の力を出しながらも親方の注意のひとしずくを決して聞き漏らすことがない。親方の声は以外に低く小い泣きで「脇があまい」とかい

を囲む。ご存じチャンコ鍋は特別な調理法があるわけじゃない。その土地により季節により入手しやすい魚など材料を集めて作る寄せ鍋の一種だ。高カロリーだった煮えればおいしい。一昔前まではこれも兄弟弟子優先で食べたから新入りの順番がくる頃は汁だけしか残っていない。ところがこの汁こそ最も栄養も最高なのだ。空腹にしみ渡る汁掛けめし。それは胃の中で完全に吸収されて血となり肉となり未来の開拓を作るのである。酒の席で私はある親方が弟子に言ってきたことを聞いて耳にして感心した。「ビールなどで身体を通り過ぎるだけだ。酒は五体にしみ渡って身体を作るものじゃかな」と。

いつかイギリスのお客様が会社へ来たとき日本の相撲取りの日常生活が見たいと言われたことがある。国内の代理店会で相撲見物のお世話をしたことあるが相撲部屋を見たいと言う外国人ははじめてだった。ちよう

「アゴを引け」などというそれを、弟子は全神経を集中して聞きとるのだ。

汗と砂でドロドロの肌を拭うのに昔は竹へらを使った。竹へらを弓のようにしならせて泥をこそげとるのだ。荒っぽいようだがタオルなどで拭くよりも能率的で合理的である。ようやく朝食のときがくる。ヘトヘトで鍋ペコの力士たちがチャンコ鍋

ど地方巡業中で困ったが大鵬親方に話したら幾人か集めて稽古風景を見せてくれた。しかも大鵬部屋では相手が外国人だからと牛肉のチャンコを作ってくれたのは有難く味もまた格別だった。ワンタフル、サンキューの連発だったのは勿論のことだ。

相撲部屋には「弟子の光は七光」と皮肉な言葉あるやなしや。ともあれ、強い弟子が出ればそ

炭